

一萬有餘戸を有したりしも、回會賴黑木圖拉の叛亂するや、盡く清兵の誅鋤する所と爲り、或は逃亡四散して、一時荒壞冷寥の地たらんとせしが、清政府頻りに南路各地よりの移民に勉め、現今復た一千餘戸を有する一都會と爲れり。城内に烏什直隸廳、協臺衙門あり。城は乾隆三十一年の新築に係り、城壁高さ一丈七尺、底厚一丈二尺、頂厚七尺、周圍四百六十餘米突、之を永寧城と名づけて四門を設く。城北は沼澤低地多く、南は山脈亂疊し、其の山脈の西端は、即ち城壁の西部とし、東端は直に阿克蘇街道に出づ。

地勢は山ならざれば沼澤、蘆葦茂生するを以て、游牧地多く、開墾地少なし。故に往々穀物の缺乏を訴ふること有り。附近吉爾吉思人の游牧するもの夥し。市日には土民の穀類を齎して、游牧民の家畜と交換するの狀況頗る奇なりとす。商店には主に露國製の下等更紗、羅紗、其の他家具類を販賣し、而も露國品は、之を喀什噶爾地方に比せば、却て廉價なりと云ふ。氣候は南路各地と同じきも、夏季の炎暑劇烈ならずと。

此地漢に在りては尉頭國、元に於ては倭赤ウオチと稱す。回人は自ら呼んで吐爾番トルバン